

浦河神社の絵馬

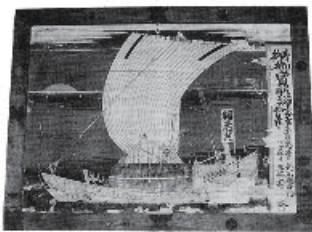


—昆布ロードの船乗りたち

浦河神社には三体の祭神がある。寛文九年（一六六九）、シャクシャインの乱が終結したときに、松前藩の将、佐藤権左衛門が東エゾ地の平和を願って金刀比羅宮（祭神大物主命《おおものぬしのみこと》）を建立する。また享和二年（一八〇一）八月十五日、浦河場所請負人、福山（松前）の商人佐野嘉右衛門が商売繁盛、海上安全を願って京都の伏見稻荷（祭神保食神《うけもちのかみ》）を勧請（かんじょう）して一社を建立する。さらに文化四年（一八〇七）、ロシアのエゾ地侵略に怯えていた幕府は、浦河に南部藩を駐留させたが、その家臣一戸義左衛門が東エゾ地浦河鎮守として、天女宮（厳島神社、祭神市杵嶋姫命《いちきしまひめのみこと》）を祀っている。

たまたま、同じ場所にあったこの三社を約十四坪の一社に合祀して稲荷社としたのが、当時の浦河場所請負人萬屋（よろずや）の漁場支配人をやっていた近江屋周介であった。天保十三年（一八四二）八月十五日のことである。これ以降、昭和六年に浦河神社と改称されるまで、浦河町民には郷社稲荷神社として親しまれていたものである。

浦河神社が日高では非常に古い歴史をもっていることもさりながら、貴重なのは同社に奉納された多くの額、絵馬の類である。明治以降の分を除いても五十点近い品々が奉納されており、浦河の歴史三百年余をうかがわせるものである。しかしシャクシャインの乱の時代（一六四八～一六六九）のもので残されているものは無い。幕府が初めて蝦夷地を直接治めた時代（一七九九～一八二一）、すなわち浦河に南部藩が駐留したとき（一七九九～一八一四）のものが六点だけ、残りは松前藩復領時代以降のものである。



浦河神社に奉納された絵馬の一例

南部藩駐留当時のものは、文字、色彩ともに専門家とも思える人の手になるもので、その内容も、馬像、俳諧、分度図、洋砲、弁財天など、バラエティに富むだけではなく、技術水準も高い作品である。しかしこの時代のもののなかには、商人、漁民など庶民の手になるものは一点もない。

残されている額、絵馬類のなかで、いわゆる庶民のものと思われるのは、天保十年（一八三九）、浦河にやってきた松尾丸という商船が奉納した船絵馬が、最初のようなものである。この絵馬には、苗字帯刀を許された商人と思われる清水善之助という名があり、“ト”の帆印がついた弁財船が極彩色で描かれている。これを始めとして、大小まちまちの弁財船の絵馬が残されている。多くは福山の商船で、場所請負人が干なまこ、フカ（サメ）のヒレ、昆布、魚粕、干ダラなどの産物を輸送するために来航させた千石船で、そのなかに大坂（阪）、越後などの船が数隻混っている。いずれも絵柄は弁財船である。絵馬に記された月次は来航時のものなのか、出航時のものなのかは判らないのだが、そのほとんどが六月、七月に集中している。また同じ船名で一年に二度も奉納している例もある。これらの多くは船籍、傭船主、船頭名を記すのが通例で、“商売繁盛”とか“海上安全”といった祈願のことばがところどころに記されている。

南部藩当時のものがウルシ仕上げで造りも堅牢なのに対し、商船のものは薄板に二～三色の色彩で

描いた単純なものである。商船は母港で数枚の絵馬を求めておいて、航海のたびに奉納していたものなのだろう。それとも、船中の船大工が航海の手すさびに作っていたものであろうか。その構図にしても、弁財船に海、水主が乗っているものもあれば、そうでないものもある。帆印だけはどの絵も確実に描かれていて、それだけで傭船主あるいは船主が判った。

これらのなかに、ひんばんにその名の出てくるのが萬屋手船、長徳丸・沖船頭幸次郎、と記されたものである。萬屋は場所請負制が幕府の手で復活された文化九年（一八一二）から明治になるまで、浦河の場所請負人となっていた福山の商人なので、たびたびの来航は頷（うなず）ける。沖船頭幸次（治）郎という人が信心深い人で、来航のたびに絵馬を奉納しただけでなく、石燈籠一對、手水鉢一基などの寄進も行っている。商船の絵馬奉納が始まるのは、漁場支配人近江屋周助が三社を合祀して稲荷社を建てた天保十三年（一八四二）以降のことで、それ以前のは一点だけにすぎない。周助は萬屋の手の者と考えれば浦河神社に関するかぎり、萬屋の一族そのものが信心深い家系であったのかも知れない。

安政元年（一八五四）、神奈川条約により箱館が開港になり、外国との貿易量が増えるとともに、さまざまな船が浦河に来航するようになる。とはいっても、和船では長い航海やシケに弱く、航海の危険は日常つきまっていた。その思いが浦河神社を造らせ、維持させた原動力だったが、これまで取り立てて資料的価値が認められなかった絵馬にも、国の大きな動きや事件の影響が反映していることが判る。浦河の歴史は浦河神社の歴史であり、その絵馬の変遷といっても過言ではないようである。これまでに失われたものもかなりあっただろうし、文字の消えたもの、判読不能のものもかなりある。今後調査が進められれば、町史の研究に資するところも大きい。

[文責 高田]

【参考】

浦河神社史料 酒井幸比古著 昭和五十五年 浦河神社

浦河神社史考 小関 一雄著 昭和三十年 私家版

高田屋嘉兵衛 須藤 隆仙著 一九八九年 国書刊行会